

オバマ新政権の選択

金安 弘

はじめに

来年は、準備期間も入れると、不戦ネット15年目になります。戦争責任・沖縄・周辺事態法・「地域でできる戦争非協力」・有事法制・朝鮮半島・パレスチナ・アフガニスタン・イラク・パキスタンというふうには、その時点での関心と必要性から力点を移動して来ました。活動費も事務所維持費も皆様からの寒波でやりくりをしてきました。この世界も「金の切れ目が縁の切れ目」と言えます。切れ目ができていない以上、皆様の支持ありと勝手にみなして非暴力の都市ゲリラ戦をもう少し続けます。来年1月20日のオバマ新政権の登場で、世界中の期待とは逆に危機を感じざるを得ません。

逆説のオバマ氏

11月4日夜かのシカゴ、大統領選挙勝利集会で10万人の人々の熱狂を、もしキング牧師が聞いているのなら、との思いでテレビを見ていた人ならば強い感動を味わざるを得なかったでしょう。それからたった一ヶ月、その熱狂に冷や水を浴びせ続ける発言がと選択をしているのがその熱狂

を作り上げた張本人だとは。自分を大統領に押し上げてくれた人々にも少しの間、夢見心地のさせてあげる余裕すらないということでしょうか。戦時国家であるとの理屈で「前政権の継承」を前提にしています。「私には現実を解決する能力がある」と言っています。オバマ氏の「チェンジ！」というスローガンは、「私には現実を変革する能力がある」と言う意味だったのではないですか。ブッシュ政権が、8年間にわたって国内外の人々に与え続けた苦難をストップさせ、次期大統領として謝罪し、救済の約束から出発することが「チェンジ！」の中身だったのではなかったでしょうか。せめて、アフガニスタンやイラクの人々に対してはそうでなければ筋が通りません。

ところが、「対テロ戦争の主戦場はアフガニスタンであり、イラク撤退から生まれる軍事的余剰をアフガニスタンへ向け、『テロ活動』の後方支援基地となっているパキスタンを必要ならば攻撃する」という方針のもとで、ブッシュ政権の国防長官ゲーツの再任をいち早く決めました。そして、「イスラエルを防衛するためにあらゆる準備ができる。」と発言を続けてきたヒラリー・クリ

ントンを国務長官に指名。記者会見でヒラリーは、「我々は再び世界に手を差し伸べる」と発言。イスラエル防衛が前提で手を差し伸べられてもアラブ諸国やイスラム教徒の人々は、拒否するか冷ややかにならざるを得ません。

何か変だぞ、オバマさん。アメリカの有権者も世界中の人々も「アメリカの有権者は、『よりましな選択』をする能力を持っていた」と評価しています。バラク・オバマと大統領オバマは別人格なのででしょうか。莫大な選挙資金を提供してくれた人々の意向を優先させるといったことなのででしょうか。ならば、経済では、貧しい人々をサブプライムローンという巨大な詐欺でだまし、巨たすぎて自滅する金融界、それに対して政治を弱い人々のために変えるという宣伝で、世界的な権力を手に入れつつあるオバマ氏は、巨大な政治的詐欺師とすることではないでしょうか。アメリカ東部の有力なエリート集団がオバマ氏を支持したのは、「黒い仮面をかぶる白人のオバマ以外に低下し続けるアメリカの地位と『アメリカンドリーム』という希望を回復することができないと信じたいから」と指摘する人もいます。オバマ氏は、あの10万人の支持者の元に返り、そこを自分の拠点として大統領職に望んでほしい。

11・26 激烈な反応

11月26日、インドのムンバイで、「同時多

発テロ」。100人以上死亡。インド警察は、パキスタンの「ラシユカル・エ・トイド」という武装組織の犯行と発表。パキスタンのカラチから漁船に乗り、800キロ沙紀のムンバイ海岸に上陸し、犯行に及んだと発表。06年7月11日、同じムンバイで爆破事件があり200人が死亡、700人が負傷、ムンバイ警察は今回と同じラシユカル・エ・トイド（Let, 信者の軍隊）の犯行と断定。犯人の証言からパキスタン—S—（軍統合情報局）の指示と支援のもとで事件は起こされたと断定。パキスタン政府は否定している。この

Letは、パキスタン全土に1200の事務所を構え、カシミール地方の24の軍事キャンプを持つと言われ、アフガニスタンやイラクに若い義勇兵を送り込むテロ集団とアメリカは規定している。アフガニスタン国境から繰り返し越境攻撃を行なうアメリカ軍。カシミールを占領し続けるインド。NPT体制未加入のインドに核開発協力をするアメリカ。オバマ陣営によるアフガニスタンへの2万人増派とパキスタンへの攻撃発言。不用意な勇ましい発言が、即、激烈な反応を引き起こす情勢にあることをオバマ次期大統領は認識していないのか、知った上での挑発発言となります。「だからタイテロ戦争は、引き続き貫徹されなければならぬ」と。「武力で平和は創れない」という世界順の常識に込めるのではなく、武力で世界を統制することで、世界の指導者の地位を回復しようとするほど敵を作り、自滅の道へと

進むブッシュ政権とをオバマ氏はいやと言うほど見てきたはずです。アフガニスタンやパキスタンの武装勢力は、オバマ氏をその沼地へ危機釣りコムと言う決断をしたように思えます。11・26事件は、オバマ氏の挑発に対する挑戦と理解しました。

「アメリカ信仰」の終わり

小泉元首相の「アメリカに従っていけば間違いない」という発言を支持する国会議員は、もう一人もいないと思います。そんな発言をすれば、有権者に馬鹿にされる状況にあることを知っているからです。省庁もそうです。例外は、日常的にアメリカに付き合わねばならない外務省と防衛省・自衛隊です。外務省は、アフガニスタン本土への自衛隊派遣を断念したはずなのに、阿附がニス店に日戦闘地域があるのかないのか検討する余地があると言いつつ出している。大きな理由は、10月16日の国連総会で、安保理の非常任理事国に当選し、09年から2年間の人気を田に入れたことです。次期アメリカ政権の支持を得て、彼岸の常任理事国入りを狙いだしました。オバマの外交ブレーンは、日本の常任理事国入りの条件に、拒否権なしと自衛隊の海外派兵を要求してきます。

防衛省・自衛隊は、在日米軍再編の中での自衛隊の位置づけを受け入れ、その準備の最中と言えます。アメリカ軍の対する絶対的信仰心なくして

どうして指揮・命令権を渡せるのでしょうか。横田基地での市兵衛統合運用調整所とは、日米統合作戦指揮所が実態です。自衛隊は、自国の自衛ではなく、在日アメリカ軍の戦略の指揮下に入る。「在日自衛隊」となります。防衛省・自衛隊は、そこに存在の活路を見出します。両省とも「アメリカ信仰」のせいでは、自分たちが腰巾着であることの自覚すらありません。「スーパーパワー幻想」の回復、この一点の実現のためにオバマ新政権は、日本に政治的・経済的攻撃をかけてきます。クリントン時代の経験をも出だしてほしい。クリントン政権を支えた人々が、もう一度、今度はオバマ大統領を支えるために再登場します。この攻勢の前で信仰を持ち続ける外務省・防衛省は、日本にとってのトロイの木馬になりかねません。経済封鎖でイラクの人々を8年間も苦しめたのはクリントン政権、日本を守る日米安保条約から世界を守る日米安保へ再定義を押し付けたのもクリントン政権。オバマ新政権の性格は、クリントンとブッシュを混ぜ合わせ、顔は黒人のバラク・オバマ氏というイメージです。もしそうなら、やはりアメリカは自滅の道を進める以外にない、と思われまます。

